

〔65・オ〕

【翻刻本文】

花宴 〔割・源十九才〕

きさらぎ廿日あまり、南殿の桜のえんせさせ
給ふ。中宮、春宮、弘徽殿の女御参り給ふ。みこ達

【現代語訳】

花宴 〔「光源氏」が十九才のときの話です〕

二月二十日頃、宮殿の南で桜の花を楽しむ宴会が行われました。
中宮の「藤壺」や「春宮」、「弘徽殿女御」も出席しています。皇子たちや

〔65・ウ〕

【翻刻本文】

かんだちめ、たんゐん給りて、文つくり給ふ。宰相君、
頭中将も、句をつくり給へり。やう／＼入日になる
ほど、春鶯囀まふに、源の紅葉の賀のおり、お
ぼし出て、春宮かざし給はせて、せちにせめ給ふ。
頭中将も柳花苑まひ給ふ。源に、中宮御めとまりて、
おほかたに 花のすがたを 見ましかば
露もこゝろの をかれましやは
上達部、后、春宮かへらせ給ひ、月いとあかうさし
出たるに、源、忍び心ちに、藤つぼのわたりしのびう
かゞひ、こうきでんのほそどのに立より給へば、三の
口あきたり。女御は、うへの御つぼねにまうのぼり

【現代語訳】

上達部たちは、探韻という、即興で詩をつくる遊びをしています。「光源氏」と
「頭中将」も詩をつくりました。そろそろ夕暮れが近づく頃に、
春鶯囀という舞が披露されると、紅葉の賀のときの「光源氏」(の舞)を
思い出した「春宮」は、「光源氏」に冠に飾る花をお与えになり、舞を催促なさいます。
「頭中将」も柳花苑という舞を披露します。(次の歌は)「光源氏」に目をとめた「藤壺」が詠んだ歌で
す。

おほかたに 花のすがたを 見ましかば

露もこゝろの をかれましやは

上達部たちや「藤壺」、「春宮」もお帰りになり、月がとても明るく
出てきた頃、「光源氏」は人に見つからないように、「藤壺」の部屋のあたりをうかがいます。
「弘徽殿女御」の《細殿》までやって来ると、三つめの戸口が
開いていました。「弘徽殿女御」は帝のお側に行っているの

〔66・オ〕

【翻刻本文】

給て、人ずくな也。人はみなねたるに、いとわかうお
かしげなる声の、なべての人とは聞えぬが、「おぼろ
月夜ににる物ぞなき」とずんじて、こなたさまに
くる。ふと袖をとらへ、「何かうとましき」とて、
ふかき夜の あはれをしるも いる月の
おぼろけならぬ ちぎりとぞおもふ

いだきおろして、戸はをしたてつ。「名のりし給へ。いか
でかうてやみなん」とのたまへば、女、
うき身世に やがてきえなば たづねても
草のはらをば とはじとやおもふ

【現代語訳】

残っている人は数人です。人々はみんな眠っているなかで、とても若く
美しい感じの声で、並の身分の人とは思えない《女性（朧月夜）》が、「《朧
月夜》に似る物ぞなき」と口ずさんで、「こちらに
近づいて来」ます。（《「光源氏」が「朧月夜」の着物の）袖をつかまえ、「何も恐ろしいことはありません」と言って、（次の歌を詠みます）

ふかき夜の あはれをしるも いる月の
おぼろけならぬ ちぎりとぞおもふ

「光源氏」は抱きかかえた「朧月夜」を（部屋の中で）《降ろして》、戸を閉めてしまいました。「光源
氏」が「お名前を教えてください。どうして
このままお別れできましよう。いいえ、できません」と言うので、「朧月夜」は、（次の歌を詠みました）

うき身世に やがてきえなば たづねても
草のはらをば とはしとやおもふ

〔66・ウ〕

〈絵1〉

光源氏が月夜の細殿で、近づいてくる朧月夜の様子をうかがっている場面。

〔67・オ〕

【翻刻本文】

〈源〉いづれぞと 露のやどりを わかんまに
こぎゝがはらに 風もこそふけ

人々おきさはげば、わりなくて、あふぎばかり
をしるしにとりかへて出給ぬ。その日は後宴
の事ありて、まぎれくらし給つ。彼しるしの
扇は桜の三重がさねにて、こきかたにかすめる
月をかきて水にうつしたる也。

世にしらぬ 心ちこそすれ あり明の
月のゆくゑを そらにまがへて

【現代語訳】

（「光源氏」も歌を返します）

いづれぞと 露のやどりを わかんまに
こぎゝがはらに 風もこそふけ

人々が起き出して騒がしくなってきたので、仕方なく、「（光源氏」と「朧月夜」は互いの）《桧扇》を
出会った証拠として《取りかえて》、「光源氏」は出て行きました。この日は後宴があったので、
「光源氏」は忙しく過ごしました。「朧月夜」と出会った証拠の
桧扇は、桜色に見えるように色紙を重ねて貼っている三枚重ねの扇で、色の濃いところに霞んだ
月を描いて、その月が水に映っているという構図です。

世にしらぬ 心ちこそすれ あり明の
月のゆくゑを そらにまがへて

〔67・ウ〕

〈絵2〉

抱きかかえた朧月夜を降ろし、光源氏と朧月夜が互いの扇を取りかえる場面。

[68・オ]

【翻刻本文】

やよひの廿日、藤花のえんに、桜二本、をくれたる、
いとおもしろきに、源氏の君おはせねば、大殿、
我やどの 花しなべての いろならば
なにかはさらに 君をまたまし
いたう暮る程に、またれてぞわたり給ける。夜すこ
しふけゆくに、源は、ゑひなやめるさまにもてなし、
まぎれたち給ぬ。しんでん〔し=合点〕に弘徽殿の女一、
女三おはします戸口によりゐ、時々うちなげく
かたによりかゝりて、几帳ごしにおぼろの手をとらへて、
〈源〉あづさゆみ いるさの山に まどふかな
ほのみし月の かげや見ゆると

【現代語訳】

三月二十日の藤の花を楽しむ宴会に、遅れて咲いている桜の木が二本あり、
とても美しいのに、「光源氏」はまだ出席していないので、大殿（「右大臣」）は、（次の歌
を詠みました）

我やどの 花しなべての いろならば
なにかはさらに 君をまたまし
だいぶ日も暮れた頃、待ち遠しがられて「光源氏」がやって来ました。しかし、夜が少し
更けた頃、「光源氏」は酔って気分が悪くなったふりをして、
さりげなく席を離れました。寝殿の「弘徽殿女御」の娘の女一宮と、
女三宮が来ている戸口に寄りかかって、時々ため息をついている
「朧月夜」に寄りかかると、「光源氏」は几帳ごしに「朧月夜」の手を取って、（次の歌を詠みました）
あづさゆみ いるさの山に まどふかな
ほのみし月の かげや見ゆると

[68・ウ]

【翻刻本文】

〈返し〉心いる かたならませば ゆみはりの
月なきそらに まよはましやは

【現代語訳】

（「朧月夜」の返事の歌です）

心いる かたならませば ゆみはりの
月なきそらに まよはましやは